

～もっと知りたいふくしまのこと～ ふくしま支援交流会を開催しました



報告いただいたコープふくしま理事の日野公代さん(中)、菅野真由美さん(右)、職員の松崎美智子さん(左)

東日本震災から5年が経ち、支援への関心を持ち続けることが難しくなっています。

とりわけ原発事故が起きた福島では、放射線による避難や健康不安、生産物等の風評被害などの問題が発生し、今でも多くの課題が残されています。

原発を抱える佐賀県民の一人一人として、福島で起きたことや困難を乗り越えた組合員のお話を聴いて、震災当時からこれまでの取り組みを知り、これからの福島への支援をどうしていけばよいか、原発をどう考えればよいか、一緒に考える場として「ふくしま支援交流会」を開催しました。

5月17日佐賀会場と18日唐津会場に、コープふくしまの理事お二人と職員の方をお招きし、マスコミからは伝えられないリアルな体験や実感を伝えてもらいました。

放射能の不安を、生協の食事検査や内部被ばく測定に参加して克服…学習して自分のものさしを持つことが大切

(コープふくしま理事菅野真由美さん)

原発事故のあと「ただちに健康に影響ない」とか「いますぐ避難した方が良い」などの情報に不安でいっぱいだった。福島市に小学生の娘とこのまま居続けるべきか悩んでいた時、生協の外部被ばく線量調査に参加して全国のデータと比較できた。他県と大きな差が見られず、除染すれば放射線を下げられることがわかった。食事による内部被ばくも、全国の生協組合員が協力した「陰膳方式」(家庭の食事一人分余分に作って日生協検査センターに送る)による放射能検査でも福島だけが低いというデータは出なかった。放射能は目に見えないが、測定によって自分の目で確かめられることで安心できた。放射線についての科学的な知識を学ぶことで情報に振り回されない自分のものさしを身に付けられた。事故直後自分に知識がなかったために娘を被爆させてしまった不安があったが内部被ばくの検査も受けられた。過剰な不安を持たなければ風評被害も止められる。でも農産物などの「風評被害」は一度広がると根が深い。福島の生産者自ら「こんなことで負けれない」と木の表皮を除染して、全数検査して安全なものを届けている。正しく福島のことを知って応援してほしい。

福島で起きたことを「覚えてくんち」(福島弁で「覚えていてください」)…ふくしまの正しい姿を見て、普通にかかわってほしい

(コープふくしま理事日野公代さん)

小学生の時から原発の見学に行かされ東電からボールペンをもらって「安全」を刷り込まれてきた。避難者は今でも10万人近くいる。これは佐賀県の小城市と武雄市の人口といっしょ。原発事故が起きたら誰も助けに入れなかった。風と雨で飯館村に放射能が流れていたのに、そこで避難者への炊き出しがふるまわれた。第一原発の廃炉処理の費用6900億円は電力会社でなく国民の税金から出ている。いまだに炉心を冷却した汚染水が毎日400トンたまり続けている。さまざまな地域の除染廃棄物の袋はたまる一方で5年しか耐久性がない。原発周辺の帰還困難、居住制限区域に立ち入ることはできない一方で、その他の町では普通に運動会も開いている。福島の良い姿を見て、普通にかかわってほしい。

見える形の復興はすすんでも「人間らしい復興」はこれから…地域で寄り添い、心豊かに生協活動を続けたい

(コープふくしま職員松崎美智子さん)

震災直後福島市周辺の空間線量が20マイクロシーベルト毎時もあったことを後から聞いた。組合員活動は震災の年の8月まですべて休止せざるを得なかった。職員も復旧のために配達に出したところ、組合員から外へ出すのは心配の声が出て事務所内だけの仕事に切り替えた。そんな中自己責任でくらしの助け合いの会のメンバーは使命感で活動した。生協が企画した放射能の学習会には入れきれないほどの組合員が集まり、質問が途切れなかった。震災前に始めた大豆を育てる食育クラブは畑の線量が高くて中止せざるをえなかった。親子ひろばも立派な室内遊び場が震災後にたくさんできて生協に集まらなくなり閉鎖した。避難者の仮設住宅への寄り添い活動はだいぶ少なくなったが、最後の一人になるまで続けていく。心の復興はまだこれからだ。



唐津会場・唐津市民会館には34名が参加しました

福島の実状、現地の声聞く

コープさが 佐賀で支援交流会

東日本大震災と東京電力福島第一原発事故から5年が過ぎた福島の実状を知るため、コープさが生協は17日、佐賀市で「ふくしま支援交流会」を開いた。現地の生協理事と職員を招いて話を聞き、交流と支援を続けることを確認した。

コープふくしま理事の菅野真由美さん(44)は「原発事故による放射能汚染に向き合って」の題で報告した。

放射能汚染について「直ちに影響は出ないレベル」とか「今すぐ避難した方が*



福島の実状について話すコープふくしま理事の日野公代さん(佐賀市)

「いい」といった情報が交錯。住んでいる福島市は原発から約60キロ離れているが、当時小学3年生だった娘を連れて避難することも考えた。それで放射能の勉強会に参加した。ガラスパッキという線量計で外部被曝線量を計ったところ、ほかの11都道府県と大差はなかった。それを見て、福島に残ることにした。

菅野さんは「放射線は見えないが測定はできる。空間線量が高くても除染で低くできる。自分の物差しで判断することが大事」と語り、「知らない」と不安が広がりがやすい。学ぶことで過剰な不安や風評に振り回されなくなる」と分析した。

理事の日野公代さん(50)も放射能汚染に触れ、「福島だからと差別したり、かわいそうだと思ったりしないで欲しい。同じ原発立地県なのでいろんなことを共有できれば」と話した。職員の松崎美智子さん(62)は「福島で起きていることを話題にして下さい。それが風化へのブレーキになる」と訴えた。

コープさがは今後も、福島の子どもを招いたり福島の実物を購入したりして交流を続けていく。

(宮田富士男)

佐賀新聞 2016.5.19

「福島生活今も不安」

コープさが 震災5年、現地の3人支援交流会

復興が長引く福島県の現地に住む3人が東日本大震災発生時から抱えている不安などを語った。

コープさが生活協同組合が福島県の支援に役立てようと開き、交流のあるコープふくしまの理事や職員3人が現況を報告した。

同理事で福島県・中通り



佐賀会場・市民活動プラザには35名が参加しました



「復興はこれから。時々福島を思い出してほしい」と訴えた。(福本真理)

震災発生以降の福島での生活について語る菅野さん(佐賀市)の佐賀商工ビル

地方で暮らす菅野真由美さんは、現在中学生の娘と自主避難も考えていたが、食事に含まれる放射性物質量の測定値や、2014年に全国12都道府県の組合員らが調査した外部被曝線量から、福島県で暮らせると判断した。ただ「将来、子どもに健康被害が出ないか、結婚で不利益を被らないか、母親たちは同じ不安を抱えている」と語った。他の2人は、自宅庭での除染作業や同組合の活動として取り組むセシウムを減らす調理法を学ぶ講習会、仮設住宅での茶話会の様子などを紹介。「復興はこれから。時々福島を思い出してほしい」と訴えた。